

接続法と「話法の助動詞」

—語用論的観点からの分析のために—

瀬川真由美

1. 問題提起

発話には、客観的な事実の描写（以下、「命題」と呼ぶ。）が述べられているだけでなく、発話者の「命題」に対する確信の強さなど（以下、「心的態度」と呼ぶ。）と発話意図に基づいて「命題」をどのように聞き手に提示するのかが含まれている。そのような発話者の「命題」に対する態度を包括的に modality（「モダリティ」）と呼ぶことが多い（DUDEN Band 4 : Die Grammatik. S.1125）。

ドイツ語においては、「命題」に対する発話者の「心的態度」を表示する形式が、動詞に関わる 2 種類のシステムと品詞論的には副詞と分類される統語的意味的に共通性を持つ一群の語が担っている。前者は不定形とともに用いられる Modalverben（「話法の助動詞」と呼びならわされている。）と不定詞を形態的に変化させ意味を付加する接続法であり、後者は「命題」に対する発話者の「心的態度」のみを表示する機能を語彙的に担うとされる副詞（「心態詞」と呼びならわされている。）である。ドイツ語に存在する発話者の「命題」に対する「心的態度」を表示する機能を担うこれら 3 種類の形式

は、発話者が「命題」を聞き手に提示する際の「命題」の状態を標示するためにそれぞれが個別に機能しているかのように分析されてきている(Deutsche Satzsemantik. S.194-198)。分析に用いられる要素は「事実性」や「証拠性」といった術語で表されている(Deutsche Grammatik. S.506-509)。また当該の文をパラフレーズすることにより「モダリティ」が「命題」の内部にあるのか、「命題」の外にあるのかで分析されることも多い(Focusparticles in German. S.125, Deutsche Grammatik. S.501-502)。しかし、「話法の助動詞」は語彙的にすでに「モダリティ」の意味的機能を含意しているにもかかわらず、接続法により形態的に語形変化をおこし意味的にも直説法とは異なる機能を担うようになる。また「心態詞」も定形が直説法である場合と接続法である場合では意味的共起可能性に差が出てくる。

本稿では、ドイツ語の接続法を統語的意味的語用論的観点から眺め直し、従来の分析では点的に捉えられていた接続法が担う意味的機能を、何らかの連続的あるいは線的尺度で捉え直すために補われるべき点を指摘することを試みる。

第2章では、従来の接続法についての記述を Die Grammatik、Deutsche Grammatik、Grammatik der deutschen Sprache にて概観する。

第3章では、接続法と「話法の助動詞」および「心態詞」の連関について述べる。

第4章では、第3章での現象に考察を加え、今後の課題とすべき点を指摘する。

2. 従来の接続法の記述

本章では接続法についてもっとも信頼のできる3種類の記述を概観する。なお本稿では意味的機能に焦点を当てるため、形態的語形変化および直説法と接続法の時制に関する対応関係は概要の中に含めない。

本章の例文は当該文献に挙げられている例文を再録した。グロスと英語の

逐語的対応、日本語の対訳文は本稿にて作成し付記した。

2.1 DUDEN Band 4.:Die Grammatik における記述の概要

2.1.1 接続法 I 式と接続法 II 式の動詞の語彙に関わる意味的な違い

接続法 I 式と接続法 II 式の違いを以下のように説明している (B.4. S.508-510)。

例文 (1) に見られるように接続法 I 式では発話者が事柄の描写を発話者以外からの情報として受け取ってもらうことを意図し、例文 (2) では描写されている出来事は事実として述べられているのではない。動詞の接続法 II 式を理解するためには特別な文脈が存在しなければならない。

(1) Es regne_{Konj.I}. Das Wasser sei_{Konj.I} wieder gestiegen.

it rain_{subj.} the water be_{subj.} again increased

雨が降っているとのこと。 水位が再び上昇している模様です。

Die Feuerwehr werde_{Konj.I} kommen.

the fire brigade become_{subj.} come

消防隊が到着する見込みのようです。

(2) Es hat nicht geregnet. Das Wasser wäre_{Konj.II} wieder gestiegen.

it has not rained the water become_{subj.} again increased

雨は降らなかった。 水位は再び上昇したかもしれません。

Die Feuerwehr würde_{Konj.II} kommen.

the fire brigade become_{subj.} come

消防隊が駆け付けたかもしれません。

2.1.2 接続法 I 式と接続法 II 式の機能

接続法 I 式と接続法 II 式の機能について大きく 2 つに分類している (ibid. S.522)。接続法の使用例として、「非現実あるいは可能性」の表示と、「報告

文」の形成があげられている。特に前者の「非現実あるいは可能性」はもっぱら接続法 II 式が担う機能であり、後者は独立した文すなわち文脈を必要とせず接続法 I 式が単独で機能している。接続法 II 式を用いた発話では、発話者は発話を現実の事柄に関する発話としてではなく、思考の内容として理解されることを意図している。その思考の内容が過去に関わっていれば「非現実」として描写され、現在あるいは未来のものとして提示されれば「可能性」として語られることになる (ibid. S.523)。Modalverben (「話法の助動詞」) が接続法 II 式の形態的变化を起こした場合には、その語彙の意味は保持されたまま、描写されている出来事への発話者の確信の持ち方 (あるいは確信のできなさ) が表現される (ibid. S.527)。

2.1.3 接続法 II 式が担う Höflichkeit (「礼儀正しさ」)

疑問文の形式にのっとって接続法 II 式は Höflichkeit (「礼儀正しさ」) を表現するのに頻繁に用いられる。これらの用法は werden の接続法 II 式を用いた構文との置き換えはできない。「礼儀正しい」あるいは「注意深い」接続法 II 式は、本来の接続法 II 式の用法に結びついている「非現実の仮定」を使って、聞き手に談話における筋の流れに関するいわば裁量権をより大きく付与するために貢献している (ibid. S.527-528)。

(3) Würden_{Konj,II} Sie bitte hereinkommen?

Become_{subj.} you please come in

どうぞお入りになりませんか。

(4) Ich hätte_{Konj,II} Sie gern einmal gesprochen.

I have_{subj.} you with pleasure once spoken

一度あなたとお話しをさせていただきたかったのです。

2.1.4 接続法 I 式が担う機能

接続法 I 式は「報告文」であることを表示する機能がある。独立した単独の文では「引用」であるが、それが連続しテキストになると「報告文」になる。接続法 I 式を 3 人称を主語として用いると「体験話法」になり、1 人称を主語とすると「内なる独白」と解釈されるようになる (ibid. S.530-535, 538-539)。

以上、Die Grammatik における接続法の記述を概観した。

2.2 Deutsche Grammatik における記述の概要

接続法については間接話法との関連と直説法と直接話法との対比で形態的説明がなされている (Deutsche Grammatik. S.188-200)。意味的機能として、「非現実条件文」と「単文」に大別し記述されている (ibid. S.201-207)。

2.2.1 「非現実条件文」

間接話法においては、当該文が発話の再現であることを標示する要素が接続法の他にも存在しているため、接続法であることは任意である。しかし条件文における接続法は、「非現実」を標示する唯一の手段であるため義務的である (ibid. S.201)。

「非現実条件文」の使用の際には発話者は現実の体験と対称的立場に関わっている。過去に関わる場合には条件が満たされなかったことになる。未来に関わる場合には、発話は条件が満たされることも満たされないこともあることを述べている (ibid. S.202)。

(5) Wenn du Zeit hättest_[Konj,II], könnten_[Konj,II] wir am Sonntag etwas

if you time have_{subj.} can_{subj.} we on the Sunday something

zusammen unternehmen.

together make

もしも君に時間があるなら、今度の日曜日に何かを一緒にできるのに。

- (6) Wenn morgen Sonntag wäre_{Konj,II}, könnten_{Konj,II} wir einen Ausflug machen.

if tomorrow Sunday be_{subj.} can_{subj.} we a trip make

明日が日曜日なら、ハイキングに行けるのに。

「礼儀正しい」あるいは「注意深い」接続法II式の用法がある (ibid. S.203)。

- (7) Der Mantel im Schaufenster könnte_{Konj,II} mir gefallen.

the coat in the shop window can_{subj.} me please

(もし尋ねられたら) ショウウィンドウにあるコートが気に入っている
(と答えるのに)。

2.2.2 「非現実譲歩文」と「非現実結果文」

「非現実譲歩文」には「非現実」を表現する接続法があり、「条件文」と形式的には一致しており、「条件文」と弁別される特徴は auch, sogar, selbst の存在のみである。「非現実結果文」と「条件文」との違いは、副文(結果あるいは帰結を表す文)にのみ接続法が出現することにある (ibid. S.204)。

- (8) Das Wasser ist zu kalt, als dass man darin baden könnte_{Konj,II}.

the water is too cold so that they in it bathe can_{subj.}

水があまりに冷たいので、そこでは泳げない。

このように「非現実結果文」にあるように、「結果文」に接続法が出現すると否定的「結果文」とであると判断される。接続法はこの場合、否定的「結果文」を強調する付加的形式上の標識である (ibid. S.204)。

2.2.3 単文

単文に用いられる接続法は学術的記述において、複数の著者が想定される表現で「受身」の意味的機能を担っている (ibid. S.205)。

主文と副文をいわば圧縮した表現にも用いられる (ibid. S.206)。

(9) Wenn er bald käme_{Konj,II}!

if he soon come_{subj.}

彼が早く来てくれればいいのに。

(10) Er hätte_{Konj,II} es mir sagen müssen.

he have_{subj.} it me say must

彼はそれを私に言ってくればよかったのに。

「非現実」を含む「非現実条件文」「非現実願望文」「話法の助動詞構文」はそれぞれ次の意味的機能を担っている。すなわち「非現実条件文」は「制限」を表す意味的機能を担い、「非現実願望文」は「願望」を表す意味的機能を担い、「話法の助動詞構文」は「要求」を表す意味的機能を担っている (ibid. S.206)。

「非現実願望文」では「願望」であることの標識は副詞 *doch, nur* などであり、接続法はその「願望」の「非現実的特徴」を標示している。原則的には「充足不可能 (非現実)」であるという特徴を表現する機能を担っている (ibid. S.206)。

(11) Wenn ich dir doch helfen könnte_{Konj,II}!

if I you but help can_{subj.}

君を手助けしてあげられればいいのだけれど。

「話法の助動詞構文」では接続法は現在の事柄に対するよりも過去の出来

事に対して用いられる傾向が強い。このような接続法の用法は *müssen, sollen, dürfen* でのみ観察され、「充足不可能な要求」を記述している (ibid. S.206)。

(12) Sie haben die Arbeit nicht vorbereitet.

you have the work not prepared

あなたは仕事の準備をしませんでした。

Sie hätten_{Konj.II} die Arbeit vorbereiten müssen.

you have_{subj.} the work prepare must

あなたは仕事の準備をしておくべきだったのに。

以上、Deutsche Grammatik における接続法の記述を概観した。

2.3 Grammatik der deutschen Sprache における記述の概要

接続法の形態的变化と直説法との時制の比較が多くなされ、接続法の意味的機能については「事実性」を中心に記述されている (Grammatik der deutschen Sprache. S.1744)。また「非現実」と「可能性」の境界は定かではなく、文脈に依存していることも指摘されている (ibid. S.1744)。

間接話法では、発話時の発話者と「命題」の結びつきの質が遠く離れており、モダリティの文脈では現実の世界、すなわち出来事が起きている世界から、「命題」の知識が遠く離れていることが示されると説明している (ibid. S.1763)。

「事実性」が問題とされる思考を表現したり認識を表す動詞の場合、発話者からの視点で原則的には直説法が用いられるべきであるが、モダリティを含意したり動詞を否定する場合にはその限りではない (ibid. S.1772)。「あり得るかもしれない」という意味合いでのモダリティあるいは「非事実」は、間接話法において接続法 II 式が用いられる可能性がある。「あり得るかもしれない」という意味合いでのモダリティあるいは「非事実」は、「反事実」

の条件や「反事実」の要素が述べられている場合には、もちろん思考や発話の再現と関わりを持つものではない (ibid. S.1773)。

接続法 I 式は間接話法の文脈で使用されるが、現代ドイツ語にあつては直説法にとってかわられている場合もマンハイマーコーパス I では 3 割程度ある (ibid. S.1784)。しかしマスメディア、とりわけニュースはつねに間接話法では接続法 I 式が用いられている。書き言葉では接続法 I 式と接続法 II 式の書き分けは間接話法では行われているが、口頭表現においては間接話法でも直説法が用いられている (ibid. S.1784)。

接続法の使用に際して発話行為における「命題」にとって、典型的には発話者と世界への二重の関係性が間接的に生み出されている。接続法が用いられている「命題」の表現は常に実際の発話者と実在する世界には当てはまらないということと一致している。接続法 I 式は発話者に関して隔たり (間接的文脈) を示し、接続法 II 式は世界に関して隔たり (モダリティの文脈) を示す。要求話法の接続法 I 式は自発的発話の背景を持って現実世界を関連付け、間接的文脈での接続法 II 式は発話者から遠く隔たっていることを標示している。モダリティの文脈での接続法 II 式は現実世界との関係なのか、可能な世界との関係なのかに応じた 2 種類の使用のされ方がある (ibid. S.1786)。

以上、Grammatik der deutschen Sprache における接続法の記述を概観した。

本章では Die Grammatik、Deutsche Grammatik、Grammatik der deutschen Sprache の記述における接続法が担う主に意味的機能について概観した。

第 3 章では、この接続法の機能がどのように「話法の助動詞」および「心態詞」と関連しているのか例文により示す。

3. 接続法の機能と「話法の助動詞」および「心態詞」とはどのような連関にあるのか

本章では、接続法と「話法の助動詞」および「心態詞」が具体的な文形成においてどのような振る舞いをしているのかを観察する。なお、本章のすべての例文は本稿において作成しインフォーマントにて確認しグロスと英語の逐語的対応、日本語の対訳文を付記した。

3.1 「話法の助動詞」と「心態詞」

「話法の助動詞」の意味論的語用論的役割はコミュニケーションにおいて、客観的に出来事を描出するのではなく、発話者と発話内容がどのように結びついているのかを標示する機能にある (Grammatik der deutschen Sprache. S.1882, Deutsche Grammatik. S.131)。その発話者が発話内容をどのように提示しているかを示す5種類、すなわち「認識的」「規範的」「目的論的」「意志的」「環境的」が大別される (Grammatik der deutschen Sprache. S.1884)。本稿では「認識的」な「話法の助動詞」の用法を中心に考察を進めるが、他の用法との区別を明らかにするために、5種類の用法を下記にまとめる。

- ・ 認識的発話背景：出来事の描出に重要であり得ると関係付けられるものすべての知識が含まれる。
- ・ 規範的発話背景：人間の間で見られる社会的規範、法律、道徳的価値に関わる。
- ・ 目的論的発話背景：目標、目的の到達に関わる。
- ・ 意志的発話背景：個人に関わる希望、意志、興味に関わる。
- ・ 環境的発話背景：主語自体に関わる場合と主語の他の環境に関わる場合とがある。

「話法の助動詞」は以上のような発話背景との関連で概略される (ibid. S.1884-1887)。また、「心態詞」も発話者と発話内容を結びつける役割を担っている (Die Grammatik. S.593, Deutsche Grammatik. S.501-505)。さらに

「話法の助動詞」と「心態詞」を共起させることによって「認知的」な発話の前提が明確化される (Grammatik der deutschen Sprache. S.1883)。なお、「話法の助動詞」についてはそれぞれの「話法の助動詞」の個別の現象を個別の語彙的意味との相互の関連で論じることも可能であり (ibid. S.1888-1897)、さらに競合する「助動詞相当」の表現についてもその意味について比較し記述することもできる (ibid. S.18897-1902)。しかし本稿では接続法との関連を中心に観察するため、個別の「話法の助動詞」の用法については立ち入らない。

3.2 接続法と「話法の助動詞」および「心態詞」の共起性

「話法の助動詞」の意味論的分析では描写される出来事が「どのように発話者と関連付けられるのか」を提示することが「認知的」な「話法の助動詞」の特徴とされている。その一方で、接続法もまた描写される出来事を発話者がどのように認識しているのかを提示する機能を持つことが前提とされている (Deutsche Satzsemantik. S.215, Die Grammatik. S.506-507, Deutsche Grammatik. S.131, 136-137)。「話法の助動詞」は、「婉曲」表現あるいは「勧誘」などに用いられることが常に指摘され (Grammatik der deutschen Sprache. S.1914-1918, Deutsche Grammatik. S.615)、接続法も「礼儀正しい」表現を実現する機能を担うことも時折指摘されている (Grammatik der deutschen Sprache. S.1920)。助動詞 werden も「話法の助動詞」と同様に直説法で共起する主語の人称により担う意味的機能が異なることは確認されている。さらに、werden の接続法 II 式に特化し、当該の形式がどのような統語的環境に現れ得るのか、それはそれぞれどのような意味的機能を担っているのかが分析されている (Die Entwicklung der Konstruktion würde + Infinitiv im Deutschen. S.32-37)。「話法の助動詞」も直説法においても同一の「話法の助動詞」であっても担う意味的機能が異なっており deontic と epistemic に区分されている (Deutsche Grammatik. S.131)。

「心態詞」は否定の対象にはならない (Deutsche Grammatik. S.503) が、

epistemic な「話法の助動詞」が否定の対象になり得るのかを例文により示す。

(13) Er soll_{Ind.} krank sein.

he shall sick be

彼は病気がそうだ。

例文 (13) は次のようにパラフレーズされる。

= (14) Ich habe gehört, dass er krank ist.

I have heard that he sick is

例文 (13) の発話者は「話法の助動詞」により発話内容が「伝聞」であることを提示していることが分かる。

例文 (13) を否定文に書き換える。

(15) Er soll_{Ind.} nicht krank sein.

he shall not sick be

彼は病気ではないそうだ。

例文 (15) は次のようにパラフレーズされる。

= (16) Ich habe gehört, dass er nicht krank ist.

I have heard that he not sick is

= (17) *Ich habe nicht gehört, dass er krank ist.

*I have not heard that he sick is

例文 (15) は例文 (16) にパラフレーズされるが、例文 (17) のようにはパラフレーズされない。したがって否定される対象は「話法の助動詞」ではなく、より詳述すれば「話法の助動詞」の epistemic な機能ではなく、発話内容の出来事に否定が含まれるように解釈される。

- (18) Er kann_{Ind.} krank sein.
he can sick be
彼は病気かもしれない。

例文 (18) は次のようにパラフレーズされる。

- = (19) Es ist möglich, dass er krank ist.
it is possible that he sick is

例文 (18) の発話者は「彼が病気である」という出来事を推測していることを提示している。

例文 (18) を否定文に書き換える。

- (20) Er kann_{Ind.} nicht krank sein.
he can not sick be
彼は病気ではないかもしれない。

例文 (20) は次のようにパラフレーズされる。

- = (21) ??Es ist möglich, dass er nicht krank ist.
??it is possible that he not sick is
= (22) Es ist unmöglich, dass er krank ist.
it is impossible that he sick is

例文 (20) は例文 (22) にパラフレーズされるが、例文 (21) のようなパラフレーズは不自然さが残る。このことから「話法の助動詞」の epistemic な機能も均質ではない現象のように表層的には見受けられる。しかし、これは発話者が「推測していない」ことを示唆しているのではない。

次に接続法 II 式と「心態詞」が共起性に関してどのような振る舞いをす

るのかに関して例文を示す。

(23) Er wäre_{Konj.II} krank.

he were_{subj.} sick

彼は病気かもしれない。

例文(23)は次のようにパラフレーズされる。

= (24) Ich bin nicht sicher, dass er krank ist.

I am not sure that he sick is

例文(24)は例文(23)よりも発話内容の出来事についての発話者の確証の度合いが低い。

例文(23)を直説法にし「心態詞」を付加する。

(25) Er ist vielleicht krank.

he is perhaps sick

彼は病気かもしれない。

例文(25)は次のようにパラフレーズされる。

= (26) Ich glaube, dass er krank ist.

I believe that he sick is

例文(25)は発話者が発話内容の出来事について事実として強い確証を持っていないことを提示していることが見て取れる。しかし例文(25)に直説法で「話法の助動詞」を付加した例文(27)は不自然な表現になる。

(27) ??Er kann_{ind.} vielleicht krank sein.

??he can perhaps sick be

彼はひょっとして病気かもしれない。

ところが例文 (27) の「話法の助動詞」を接続法 II 式に形態的に語形変化させると容認度は格段に上がる。

- (28) Er könnte_{Konj.II} vielleicht krank sein.
he could_{subj} perhaps sick be

例文 (27) と例文 (28) は「話法の助動詞」が直説法であるのか接続法であるのかの点で異なっている。このことから接続法 II 式と vielleicht の共起性の確認のために例文 (23) に vielleicht を付加する。

- (29) *Er wäre_{Konj.II} vielleicht krank.
*he were_{subj} perhaps sick

例文 (23) に vielleicht を挿入し不適格文となった例文 (29) に異なる「心態詞」を挿入しても不適格文のままである。

- (30) *Er wäre_{Konj.II} wahrscheinlich krank.
*he were_{subj} probably sick

しかし例文 (30) を「話法の助動詞」の直説法により書き換えると若干容認度が上がる。

- (31) ??Er kann_{Ind.} wahrscheinlich krank sein.
??he can probably sick be

例文 (27) と例文 (31) から「話法の助動詞」の直説法と「心態詞」には何らかの意味的機能の重複あるいは背反が予想される。また、例文 (28) が適格文であることから「話法の助動詞」の接続法 II 式と「心態詞」は共起可能であり、接続法 II 式が何らかの影響を与えていることが分かる。

直説法と不変化詞の共起性を例文 (32) ~ (35) で示す。

(32) Er ist_{ind.} doch krank.
he is anyway sick
彼はそう病気だよ。

(33) Er ist_{ind.} ja krank.
he is certainly sick
彼はきっと病気だよ。

例文 (32) に「話法の助動詞」を直説法で付加しても適格文のままである。

(34) Er kann_{ind.} doch krank sein.
he can anyway sick be
彼はそう病気かもしれないよ。

例文 (33) に「話法の助動詞」を直説法で付加する。

(35) ?Er kann_{ind.} ja krank sein.
?he can certainly sick be
?彼はきっと病気かもしれないよ。

例文 (35) は不適格文とは言い難いが聞き手にとって「押しつけがましい」印象を与える。

接続法と不変化詞の共起性を例文 (36) ~ (39) で示す。

例文 (32) を接続法 II 式に形態的に語形変化させると不適格文になる。

(36) *Er wäre_{Konj.II} doch krank.
*he were_{subj.} anyway sick

例文 (33) を接続法 II 式に形態的に語形変化させると不適格文になる。

- (37) *Er wäre_{Konj.II} ja krank.
*he were_{subj.} certainly sick

例文 (34) を接続法 II 式に形態的に語形変化させても適格文のままである。

- (38) Er könnte_{Konj.II} doch krank sein.
he could_{subj.} anyway sick be
彼はそう病気かもしれないよ。

例文 (35) を接続法 II 式に形態的に語形変化させても適格文のままである。

- (39) Er könnte_{Konj.II} ja krank sein.
he could_{subj.} certainly sick be
彼はきっと病気かもしれないよ。

本章では接続法と「話法の助動詞」および「心態詞」を含む不変化詞との共起性を例文による操作テストを用いて示した。次章ではこの操作テストの結果に考察を加える。

4. 考察

第 3 章で例文による操作テストにより示したように「話法の助動詞」も接続法 II 式として形態的に語形変化し意味的に果たす機能が変化する。「話法の助動詞」は語彙的にすでにモダリティの機能を十分に含意し (Deutsche Grammatik. S.136-137)、接続法は動詞を形態的に変化させることによりモダリティの機能を担っている (Die Grammatik. S.523) ことが分かる。「心態詞」を含む不変化詞も「話法の助動詞」と同様に語彙的に談話上の機能を果たしていると考えられている (Deutsche Grammatik. S.500-509)。そのような個別の「話法の助動詞」を用いた表現の文の意味内容と、個別の接続法を

含む文の意味内容は比較検討されても、それらを連続的に捉えきれる枠組みは確定されているとは言い難い。またそのような枠組みが可能であるのかも不確定である。しかし、そのような枠組みを構築するあるいは何らかの理論を援用する可能性が否定されているものでもない。

モダリティが「命題」の内部にあるのか、「命題」の外部にあるのかは例文(13)を例文(14)にパラフレーズする、また例文(15)を例文(16)にパラフレーズすることにより明確になる可能性がある。同様に例文(23)を例文(24)にパラフレーズする、例文(25)を例文(26)にパラフレーズすることで接続法の意味的機能を解明する手がかりになる可能性がある。例文(25)、例文(32)、例文(33)のように語句を組み合わせることによってモダリティを文の意味内容に含ませるのではなく、例文(23)のように形態的語形変化によってモダリティの機能を担う接続法は、例文(27)と例文(28)の比較対照から、当該の「話法の助動詞」あるいは動詞の語彙の意味を変化させることなく、何らかの意味を付加していると解釈できる。「話法の助動詞」については個別に「発話者が発話内容に距離を置いていることを示す」といった記述(Deutsche Grammatik. S.137)や、接続法Ⅱ式は「発話者が発話内容について、現実ではなく発話者の思考により構築された事柄として理解してもらいたいということを示す標示である」といった記述(Die Grammatik. S.523)はある。この2つの要素、すなわち「話法の助動詞」と接続法Ⅱ式が共起している例文(28)、例文(38)、例文(39)は「発話者の発話内容に対する確信の度合」が問題になっているのではなく、「発話者がどのように発話内容を談話の中に置くことを意図しているのか」が問題になっていると解釈可能である。

接続法Ⅰ式の意味的機能は発話者が発話内容を第三者から受け取ったことを標示するものであった。また接続法Ⅱ式は「非現実」な事柄であることを標示するために用いられている。共通する点は「発話者が発話内容について全面的には責任を持つものではない」ことを聞き手に提示している機能である。例文(35)と例文(39)の違いはまさにこの意味論的語用論的な問題

であると考えられる。

今後は接続法が用いられる文が、発話者の「命題」に対する確信の度合と
いった尺度ではなく、発話者が聞き手に対して発話者が「命題」を談話上ど
のように提示しているように受け取ってもらうことを意図しているのかを標
示する意味的機能を担っていることを精査し、意味論的語用論的観点からそ
の機能が何らかの連続体として捉えられることを解明することを目標とした
い。

Abkürzungen/abbriviation

Ind.:Indikativ

Konj.:Konjunktiv

subj.:subjunctive

参考文献

- de Schepper, Kees. & Joos Zwarts. (2009) : Modal geometry: Remarks on the structure of a modal map. – In: Cross-linguistic Semantics of Tense, Aspect and Modality. – Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, S.245-270.
- Helbig, Gerhard & Buscha, Joachim. (1996) : Deutsche Grammatik. – Leipzig usw.: Langenscheidt. Verlag Enzyklopaedie.
- Scholze-Stubenrecht, Werner (Hg.) (1999) : Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. – Mannheim usw.: Dudenverlag.
- Smirnova, Elena (2006) : Die Entwicklung der Konstruktion würde + Infinitiv im Deutschen. – Berlin usw.: de Gruyter.
- Sudhoff, Stefan (2010) : Focus Particles in German. – In: Linguistik Aktuell. – Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- van der Auwera, Johan, Petar Kehayov & Alice Vittrant. (2009) : Acquisitive modals. – In: Cross-linguistic Semantics of Tense, Aspect and Modality. – Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, S.271-302.
- von Polenz, Peter (2008) : Deutsche Satzsemantik. – Berlin usw.: de Gruyter.
- Wermke, Matthias (Hg.) (2006) : Die Grammatik. Duden Band 4. – Mannheim usw.: Dudenverlag.
- Zifonun, Gisela, Ludman Hoffman, Bruno Strecker. (1997) : Grammatik der deutschen Sprache. Band 3. – Berlin usw.: de Gruyter.